

# 人物 現在形

単に「演劇」とくくってしまっ  
ていいのか、その表現は自由だ。  
例えば羊屋さんの代表作の一つで  
もある「Candies」。5人  
の女性が、時には踊り、時には何  
かをむさぼり、また、身にまとう  
物を脱ぎ捨てもする。時系列に進  
む物語ではない。絵の具の濃淡で  
色が変わるように、女たちは少女  
にも淑女にも変化する。ときれと  
ぎれの言葉、印象的な舞台美術、  
音楽が飛び込んでくるたび、見る  
者の五感に波立つ。「ダンス、照  
明：一番たくさんのエレメンツ

自分の記憶なのか、それとも何  
かの拍子に刷り込まれてしまった  
他人の記憶なのか、心の奥底にわ  
だかまっているかすかな残像。劇  
団「指輪ホテル」(東京)の作品  
を前にすると、そうした情景が切  
れ切れになってさわつき始める。

劇作家・演出家で、女優でもある  
主宰の羊屋白玉さん(44)は「私  
が五感で感じた過去の風景、感触、  
香り―それとともにある、悲しい  
イメージ。そういう物を入れた箱  
がたくさん(頭の中に)ある。箱  
を基に作品をつくる」と言う。普  
通ならば開けはしないパンドラの  
箱を、作品ごとにつけて続ける。「生  
きる」ということに伴う美しさ、  
醜さ、あらゆる営みを包含した演  
劇は、国内外で注目を浴びている。

(要素)をもっているから『演劇』  
と呼んでいる。生きることのどん  
なことでも演劇になる」

「指輪ホテル」の作品は、上演  
場所も自由だ。これまで船上やス  
トリップ劇場など多彩な場所に  
「出現」してきた。獨創性が高く  
評価され、米国やフランス、フィ  
リピンなどでも上演、羊屋さんは  
2006年のニュースウィーク日  
本版「世界が認めた日本人女性1  
00人」にも挙げられている。

〓〓〓〓

1994年の設立以来、指輪ホ  
テルを強く特徴づけてきたのは  
「女性性」だ。「男が書いても女  
が書いても同じという作品じゃな  
く、女性を女性が演出する作品と

いうことを意識してきた」。その  
事実をとらえ、ガリッシュ(少女  
らしい)、エロチック、などの形容  
詞が付きまといもした。ただ最近、  
羊屋さんの演出はさらに普遍へと  
踏み込んでいる。「例えば脱衣所  
で服を脱ぐ時のように、あれこれ  
考えず何の「溜め」もなくパッと  
脱ぐ。それが一番迫力がある」  
それは、他者の視線によ  
ってゆがめられることにな  
い、生のあり方。女性性を  
突き抜け、人間、いや生き  
物そのもののあり方とも言  
えるだろうか。近年の羊屋  
さんの作品は、生き物「動  
物の世界にも肉薄してきて  
いる。寓話のように、動物  
が「演じる」のだ。「動物

「生と死を考えるとほしくて」

## 五感波立たせる演劇

羊屋白玉さん (劇団「指輪ホテル」主宰)



宮崎県の海岸で撮影された、公演「洪水」のイメージフォト。ウサギとスカンクは、楽器を演奏して楽しく過ごす。でも「死んで」いる

＝PHOTO KENTA AMINAKA

の姿を借りることは、私にとつて  
は自然。そうしなくては伝わらな  
いものがあると思っっているから」  
背景には原体験がある。  
北海道に生まれ育った。幼いこ  
ろ、友人が住む集落へ遊びに行く  
と、お母さんやおばあさん、お姉  
さんたちが集まって輪になり、シ  
ヤーマン(巫女)を中心に歌い舞

っていた。アイヌ民族の儀式だっ  
た。その輪を取り囲むように、カ  
ラスたちが整然と並んでいる姿が  
目に焼きついている。「アイヌで  
は、神様は動物に姿を変えて人の  
前に現れるとされている。子ども  
のころ、そんな話を讀んだり聞い  
たりして、当たり前のように刷り  
込まれている」

〓〓〓〓

11月、大分県別府市と福岡県那  
珂川町で行う公演「洪水」も、ウサ  
ギとスカンクが登場する。しかも  
動物の「ゾンビ」として。もとも  
と2009年にイギリスで、羊屋  
さん自身が演じるソロ作品として  
初演され、その後変容しながら上  
演を続けている。演者は一人から  
二人へ。劇場や倉庫跡など、場所  
によって演出もがらりと異なる。

二匹は、何度も生き、何度も死  
ぬ。それでもまた、同じように生  
きるということを繰り返す。「生」  
を断ち切る「死」ではなく、「生」  
を肯定し、裏打ちするものとして  
の「死」。

「いつも作品を通じて、死生観  
を提案しているつもりなのです。  
見てもらうことで、自分がどうい  
う人間でどう生き、どう死ぬのか  
を、考えてもらいたくて。演劇つ  
て、そういうことができるメディ  
アだと思っ」

羊屋さんが生み出し続ける演劇  
は、現実の再現ではない。しかし、  
別世界の虚構として切り離される  
ものではない。虚と実が手を結ん  
だところに出現する、幸福なまど  
ろみの時間―そこでは生き物が、  
素のままの自分を実感しているは  
ずだ。(大矢和世)

◇「洪水～Massive Water」 11月19日  
午後7時と同20日午後5時に大分県別府市  
北浜1丁目の永久別府劇場、同25日午後7  
時に福岡県那珂川町仲2丁目のミリカロー  
デン那珂川文化ホール。チケットはいずれ  
も2000円(当日は500円増し)。アートマネ  
ージメントセンター福岡＝092(474)6181。